

# オーラル・アプローチの可能性

——「英語による英語授業」——

水 野 義 明

## 1. はじめに

「外国語の授業はその外国語を用いて行なうべきであり、また行なうことが可能である」というのが、私が米国の一大学の外国語授業の実情に親しく接した後の結論であった。私のこの見聞については「外国語教育について——シアトルでの経験」(『明治大学教養論集』第60号、昭和45年12月)と題する小文の中で述べたところである。そこでは、日本の大部分の大学での外国語の授業と比較して、次の三点が著るしい特色として挙げられている。それは①一クラスの学生数が少ないこと、②教師にネイティブ・スピーカー *native speaker* が多いこと、③授業システムが合理的なこと、である。もちろん、これ以外にもいろいろの違いは指摘できるが、私はこの三点が何よりも重要であり、特に第一点の学生数の問題が外国語授業の成否を決定する 要因であると考え。 (私は現在若干の大学で教養課程の英語を担当しているが、もっとも小さいクラスで在籍40名を上まわり、もっとも大きいクラスで在籍70名を越える。これに対して米国では、5、6名から30名どまりであり、平均して10名前後であった。) また第二点について言えば、外人講師を相当数求めようとすれば当然多額の支出を伴う。最後の授業システムの合理化とは、現在主として事務上の便宜を

中心とする「語学のクラス」を解体することであり、学生の都合と学力に応じて多種多様なコースを並列的に設置し、「語学」の特殊性を無視した画一的90分～100分単位の授業を改め、45分～50分単位に編成し、各学期毎に単位の認定を行ない、学習語学の種類を増加させる、などの措置をとるべきである。

しかし、クラスの細分化（教員数の増加）、外人講師の増加、授業システムの改編（事務量の増大）などは、いずれも教育投資という問題に行き当たり、この点で米国の大学と日本の大学、特に私学の実情との相違が否応なしに目に映ってくる。端的に言えば、「金をかけるかどうか」という問題である。（そしてその金をどこから調達してくるかという問題にもつながる。）個人としての外国語教師の力の及ぶ範囲ではない。しかしそうかと言って現状を放置しておくわけにはいかない。「英語による英語授業」の可能性は、日本の私立大学のような悪条件下にあってこそ、真の意味で探究に値するものとなるかも知れない。私は前掲の小論の末尾に「（大規模の改革はさしあたって望み得ないので）個人的にできるだけのことを実行するよりほかはない」と述べた。以下に記すのは、この「個人的にできるだけのこと」を「実行」してみた結果である。具体的に言えば「日本の平均的な私立大学の学習条件を前提として、英語による英語授業がどの程度実現可能であるか」という問に対する私の体験的解答である。外国語教育の理論や方法論への言及が殆どないのは、私自身の不勉強にもよるが、それよりもむしろ私の試行錯誤の過程をありのままに報告したいという気持ちが強かった結果である。

## 2. 私の「英語」観

本題に入る前に、私はどのような「英語」によって英語授業を行なっているのかについて簡単に述べたい。というのは、私自身は英米人の使う英語を彼等と同じ程度に流暢に駆使できるとは思わないし、またそれが絶対的な要件とは必ずしも考えないからである。もちろん「英語による英語授業」は、英語を母国語とし、また日常言語とする教師によって行なわれれば理想的である。

しかし英語圏とは地理的に隔絶したわが国において、すべての英語クラスに外人講師を求めることは不可能である。実際には大部分の英語クラスは英語を母国語とせず日常言語としても用いていない日本人の教師が担当することになる。

それならば、ネイティブ・スピーカーでないこれらの教師の行なう「英語による英語授業」は無益で無意味なのであろうか。私はそうとは思わない。なぜかと言えばネイティブ・スピーカーでなくても使うことができる「英語」が存在すると考えるからである。つまり英語には一種の国際共通語としての側面もあるという思想である。

この思想は前掲の私の論文で言及した小田実氏の英語観にも通ずるものである。簡単に言えば英米人の用いる英語以外に、国際的な交流手段としての無国籍的「英語」が存在し得るということである。多様な国籍の人々が居住する米国や、多くの民族が割拠するヨーロッパの言語状況にふれ、またアジアやアフリカからの代表も参加する国際的集会の模様接する際に、私はこのような印象を強く受けた。

この無国籍的「英語」の必要にして充分な要件は「伝達可能性」communicabilityである。言い換れば、発音、文法、語彙の各分野に亘って「普遍的な伝達手段」としての性格を強く帯びたものである。従って、たとえば発音という点では、音韻的に正確で理解可能であれば足り、音声学的な「英語らしさ」は不可欠の要請とはなくなる。語法の面でも、慣用句やことさらの口語的な表現はむしろ少ない方がよく、構文は各シチュエーションに応じて一定数のパターンを使用するのみで、複雑な構造のセンテンスは一切用いない。ただし語彙については、一面では一定数の基本語をフルに活用するパラフレーズ形式をとるが、その反面それでは語義が曖昧になる場合はむしろ積極的に新語、術語などをとり入れる方が望ましい。繰返しとなるが、要するに「コミュニケーションが簡明且つ正確に行なわれる」ということを主眼とするのである。(情緒や感動の表出は、外国語使用という本来の意味から言えば二次的性質のものである。)

以上が、「英語による英語授業」で私の考えている「英語」である。そして、このような「英語」ならば、多少の労さえ惜しまなければネイティブ・スピーカーでない教師でも充分使いこなすことができると思うし、教師の熱心と熟達の度合に応じて学生の理解と関心も高まり、生きている言語としての英語の実体を如実に感得させることもできるのである。

因みに、このような英語観に基いた英語学習では、音声として、また活字として、与えられた英語を「受動的に理解」する側面以上に、母国語以外の交流手段を媒介としてコミュニケーションを企てるという「創造的な表現」という側面が重視されてくる。その理由は、言うまでもなく、無国籍的「英語」の運用にあたっては、ネイティブ・スピーカーの慣習を金科玉条とする必要はあまりないので、学習者自身の主体的活動が中心となるからである。(同様のことは、当初から国際共通語を意図して創案されたエスペラントについても言えるであろう。私は真の意味での国際共通語ということになれば、英語や「英語」よりもエスペラントがその条件をより良く満たしていると考える。一般に世界の言語問題解決の一方法として「国際語思想」の普及と「国際語体験」の蓄積が重要であり、それが私のエスペラントや無国籍的「英語」への関心の背景をなしていると思う。拙稿「国際共通語の基本問題」『明治大学教養論集』第65号、昭和46年4月を参照。)

### 3. 「英語による英語授業」

さて以上のような基本的思想に立って英語の授業が実際に行なわれているわけであるが、その実態を以下に略述してみたい。便宜上教材、オリエンテーション、実際の授業のプロセスに分けて述べてみる。

- 1) 教科書「英語による英語授業」のための教材は(ストーリーでもエッセイでもよいが) 内容や文章が平易簡明で、教師の熟知しているものが望まし

い。私が使用してきた教科書は自分で編注した次の二点である。(教材の内容の適否、その選択の事情などについては、後述する。)

① Y. Gagarin “Road To The Stars” 真砂書房, 昭和43年 v pp.+39 pp.  
+note 22 pp.

② M. Sholokhov “The Fate Of A Man” 真砂書房, 昭和46年再版 65 pp.  
+note 19 pp.

①は、宇宙飛行士第1号となったユーリー・ガガーリンが宇宙飛行を行なうまでの半生記の英訳から、飛行当日の一章を抜粋したものであり、行文は平明で大学の教養課程の教材としてはかなり易しい。

②は、ソ連の長老作家ミハイール・ショロホフの中篇小説の英訳を全文収録したものであり、物語りの筋は単純だが、学校教育もろくに受けなかった主人公が自己の半生を口語体で語っていくという体裁をとっているために、単純に訳読の教材として用いても、やや難解ではないかと思う。通例は①を学年の前期に、②を後期に使用することになっている。

ところで、私の経験では「英語による英語授業」の場合は、適切な教材を選択することも大切であるが、選択した教材をどのように処理するかということの方が授業の成否に一層大きな影響を有しているようである。この種の授業では日本語は一切使用しないというたてまえであるから、授業の中心は英語による質疑応答ということになる。質疑応答では教師が当然イニシアティブをとることになる。しかし、常に学生の理解水準や関心の度合を考慮しながら、適時適所で適切な質問を考え出すのは至難のわざである。この問題のひとつの解決策としては教科書の該当箇所についてあらかじめ質問事項を定め、できればそれを印刷して学生にも準備させておくことが考えられる。私は、次のような練習問題集(ワークブック)を別冊として作った。

③ WORKBOOK IN Y. GAGARIN'S “ROAD TO THE STARS” 真砂書房, 昭和46年, 40 pp.

④ WORKBOOK IN M. SHOLOKHOV'S “THE FATE OF A MAN” 真

砂書房，昭和46年，40 pp.

③，④ともに趣旨や構成は同じである。実は，私の「英語による英語授業」の根幹をなしているのがこのワークブックであるので，その作成意図や内容，使用法などにつき，原本の冒頭に付した序文と使用上の注意を転載してみようと思う。

### ① ワークブックの序言

#### は じ め に

“外国語の授業はその外国語を通して行なわれることが理想である。私は米国滞在中に，大学で行なわれている各種の外国語のクラスに参加して，このような原則に基く授業が多く，その能率の良いことと，成果の大きいことに感銘を受けた。しかし，同時にそれをそのままの形で日本の大学にとり入れることはむずかしいと思った。環境と条件があまりにも異なっているからである。それにしても，現状は放置するわけにはいかない。そこで，私なりに試みに作ってみたのが，このワークブックである。

“このワークブックは，英語のみによる英語の授業を実現するための準備段階用に使われることを意図している。比較的やさしく，興味ある内容の読物に基いて，その内容の理解をためす問題を主としているが，本来は教材の受動的理解を目的とするよりも，基本的な質疑応答の型，言換え，簡単な事項の説明などを通して，何よりも，英語による「創造的表現能力」の養成に重点が置かれている。

“私の経験では，学生の予習を前提として，教材とワークブックを併用した場合，クラスによっては，日本語を一言も使わずに授業を遂行することができた。（「語学の授業」として考えると，テキストを日本語へ翻訳する作業は非能率で，できれば一切行なわない方が良いのではないかと思う）。

“更に、英語によらない授業の場合にも、補充問題、宿題などとして、広範囲の利用方法が、考えられるであろう。

“ここで選んだ教材や、それに対する設問の仕方については、私は必ずしも適切であるとは思わない。しかし、このような試みがあまりなされていないので、せめて私の「アイデア」だけでも少しも早く示しておくのは無益ではないと考えて、敢えてこのワークブックを編んだ次第である。各方面の批判と助言を得て、不十分な点を改善することができれば幸いである。

1971年 1月

水 野 義 明

## ② 使用上の注意

### このワークブックを使う前に

“1. 全体の構成など 教材となった読物を、1回90分から100分の授業に適当な分量に区分し、10課前後の‘lessons’としてある。一年二学期制の場合、一週一回の授業があるとして、前期または後期の一学期間に終了することを標準とする。学生の予習を前提としているので、できれば学期の初めに、名授業日毎に各課を配当した授業計画を発表しておくことが望ましい。

“2. 各課の構成など 各課は次の四種類の設問から成っている。

I. 教材に基く応答表現の練習 II. 言い換え, III. 質問表現の練習  
IV. 簡単な定義または説明。(設問に利用した例文は、すべて教材に準拠した。)

以下に、それぞれ、その趣旨と用例とについて簡単に述べることにする。ただし、これは、私ならばこのようにするという意味であり、これ以外にもいろいろな利用法が考えられる。なお教室内の作業は必要な場合以外には口頭で行なう方が良いと思う。

**“I. Answer in a complete sentence.**

教材の内容理解に関する質問であるが、‘complete sentence’（主部と述部を具備した文）という点に注意が必要である。舌足らずの片言英語におち入らないためにこの種の練習はどうしても必要である。また、答えには、できるだけ代名詞や代動詞などを用いて、冗長感を除くことが望ましい。

**(例 1) Does he speak English ?**

→Yes, he speaks English.

→Yes, he does. (better)

**(例 2) Who went with you there ?**

→John went with me there.

→John did. (better)

ただし、‘complete sentence’ という趣旨に従って、

**(例 3) When did you get up this morning ?**

→At seven.

→I got up at seven. (better)

基礎的な型が身につくまでは、原則として、質問の形式に忠実に従って、答えるべきである。

**(例 4) What do you think this is ?**

→It is a book.

→I think it is a book (better)

**“II. Say in another way.**

これは言い換えの練習であるが、クラスの実情に応じて、一部分の言い換え、全体の言い換えなど、いろいろに利用できる。具体的には、語、句、節、全文の言い換えが考えられ、またその言い換える基準は必ずしも語法ばかりでなく、文の趣旨についても可能である。

**(例 5) We couldn't leave home because it was raining heavily.**



1. leave home→go out, heavily→hard
2. couldn't→were unable to
3. because.....→because of the heavy rain
4. →Heavy rain prevented us from leaving home.  
→It was raining heavily, and so we couldn't leave home.  
→It was impossible for us to leave home.....

(例6) **Strike iron, while it is hot.**

- Make hay, while the sun shines.
- Do your best, while you are young.
- You had better make full use of your chance while you have it.

**“III. Make some questions to each of the sentences.**

答えるばかりでなく、自分でも質問できるようになるための練習である。一般に疑問文には次の三種類がある。

1. 単純疑問文 (疑問詞を用いず、答えに ‘Yes’, ‘No’ を必要とするもの)
2. 選択疑問文 (疑問詞を用いず、‘or’ のあることが特色)
3. 特定疑問文 (疑問詞を用いるもの)

また、必要に応じてそれぞれ肯定、否定の質問を作ることでもある。

(例7) **Columbus discovered America in 1492.**

- Did Columbus discover America in 1492?
- Didn't C. d. A. in 1492?
- Did C. d. A. or Africa in 1492?
- Did C. d. A. in 1492 or in 1495?
- Who discovered A. in 1492?
- What did C. discover in 1492?
- When did C. d. America?

→Which did C.d. in 1492, America or Africa?

“設問で主語が‘I’または‘we’になっているときは、‘you’を主語とする疑問文を作るようにすれば良いと思う。逆もほぼ同様。

(例8) **I saw him in the classroom.**

→Did you see him in the c.?

→Whom did you see in the c.? etc.

このようにして、同じような練習を何度も繰返して、質問表現に完全に習熟すべきである。しかし、質問表現は種類が限られているので、往々にして単調になる。そういうときは、前節の「言い換え」を、質問表現の練習に応用しても良い。

(例9) **I felt sad when I saw them off.**

→Did you feel sad when you ……?

→When did you feel sad?

→How did you feel, seeing them off?

→Did the sight of their going away make you feel sad?

→In what mental condition did you see them off?

#### **“IV. Explain in simple English.**

簡単な定義や説明の練習である。クラスの実情によっては、口頭によってやや自由な表現を試みるのも良い。英語の練習のためであるから、理論的厳密性は必ずしも必要としない。

(例10) **a college**

1. A college is a school for those who have graduated from a high school.
2. A college is a school intended to give higher education to high school graduates.
3. I think a college is a very nice place. It opens a large prospect for your future life. Don't worry about petty troubles.

You just try your best in your study, and that's all you can hope for a college student, I suppose.

“なお巻末には、‘Topics for Discussion’をつけ加えた。より自由な表現に到るための補充教材として、利用できるであろう。私は、実際には、一人か二人の学生にあらかじめ、一定のトピックを与えておき、毎回授業の終りに、一人5分か10分くらいの間、クラスで発表させることにしている。この他にも何人かを選んで、モデル討論を行なってもよいであろう。”

2) **オリエンテーション** 毎学年の最初の時間は「英語による英語授業」の説明にあてる。学生が心得ておくべき事項を記した印刷物を配布して授業方針を説明したのだが、現在それが手許にないので、その要点のみを以下に紹介する。

① **基本方針** 英語による英語の授業であり、教室内では原則として日本語は一切用いない。(教師ばかりでなく、学生も相互に私語する場合にも英語によることが望ましい。)教科書の英語を日本語に移しかえる翻訳作業は行なわない。その代りに教科書とワークブックとに基いての質疑応答を中心とし、重要事項の英語による説明及び学生有志のスピーチをこれに配する。

② **時間配当など** 通例90分ないし100分の授業時間を二分して、中間5分程度の休憩をおく。(出席は後半のはじめにとる。英語で応答するように指導する。)前半では前述のワークブックの第1種類の質問(Answer in English)への解答を検討する。後半はその他の問題及びスピーチにあてる。授業は所定の時間通りに始まり、時間通りに終る。

③ **授業計画など** 毎学期の予定授業日毎に教科書(具体的にはワークブック)の各課を配当する。たとえば、

4月15日 第1課

4月22日 第2課

4月29日 祝 日

5月7日 第3課

という具合に、何月何日に何を学習するかをあらかじめ確定しておく。これは固定した計画であり、途中欠講する場合があっても変更はしない。(すなわち仮りに4月22日に授業ができなかった場合、次回の5月7日には、前回学習できなかった第2課を対象とせず、計画表の通り第3課を学習することになる。この場合第2課は学生の自習教材となる。)通例各学期の最後の週は、‘Review’及び‘Discussion’の時間としてあけておく。

④ **その他の心得** 授業は学生の予習を前提とするので、計画表に従って当日学習すべき課のワークブックの質問に解答を準備してくること。教師は事前の予告なしにその場でアト・ランダムに学生を指名して答えさせる。(最初は出欠の点呼をする代りに毎回小テストを行ない、その答案提出を以て出席とみなした)。各時間の終りのスピーチは前週に該当者をきめておく。……

毎年開講時に学生に以上の諸点について具体例を挙げて説明するのであるが、特に「英語による英語授業」の意義と趣旨、英語的雰囲気をつ積極的に作り出す必要について強調し、学生の理解と協力を要請する。

3) **実際の授業** 次ぎに、私の「英語による英語授業」の実際について、平均的な例を挙げて説明してみようと思う。便宜上、導入、前半、後半に分けて考えてみる。

① **導入** 教師は教室に入ると、まず“Good morning!” “How are you?” “Nice day, isn’t it?” など簡単な挨拶や呼びかけを行ない、時には更に“What day of the week is it today?” “What time is it now?” “When did you get up this morning?” などのやや実質的な質問をまわりの学生に発する(英語的雰囲気造成)。正しい解答が得られたところで「導入」は普通終るが、たまたま国内、国外の重要なニュースが伝えられた場合には、それについて簡単に説明し、難解な用語は板書して示す(学生の理解力を考えると、英字新聞などそのまま読み上げるのは好ましくない)。この方法は時事問

題に対する興味を英語の学習に利用したもので、私の経験では、「公害」「機動隊」「核実験」「円切り上げ」などの英語を学生はよく習得した。

② 展開——前半 導入を終えるとすぐ教材の学習にとりかかる。「オリエンテーション」の項で述べたように、前半では教科書の物語の内容 (Who? When? Where? What? How? Why?) についての設問に答えるのであるが、英語的雰囲気を保持するために、まずワークブックの質問を読みあげさせ、それからその答えをいわせる。(本来ならば、教師が随時に設問する方が自然なシチュエーションに近いのであるが、それは教師の側からも学生の側からも困難な事情があるので、その改善の策としてこのような方式をとった。)教師は学生の答えに対して直ちに当否の判断を明確に示し、まちがった答えのときには、二、三のヒントを与えて正しい答を見出させるようにする。時には予習して来ない学生や、答えられない学生も出てくるが、そういう場合にも、クラス全体の英語の流れを中断しないために、勉強して来なかったり、答えられない旨を英語で言うように指導し、学生のようすによっては、その理由をも英語で話すように求める。

以上述べたところを実例によって示せば次の通りとなる。(設問はワークブックにあるものとは限らない。)

i) テキスト (Y. Gagarin "Road To The Stars" p. 3, ll. 11~24) 'I' とは Gagarin を指す。

I walked slowly along the Kremlin walls on the embankment of the river. To the chimes of the big clock on Spasskaya Tower I crossed Red Square. I stopped in front of the Mausoleum, saluted and watched the change of guards. Reassured by a flight of pigeons and the rustle of the State Flag flying over the Kremlin Palace, I slowly wandered through a city with no equal in the world. Feeling the proximity of spring streams of people surged all around me. Thousands of people went about their own affairs. None of them had any-

thing to do with me and none knew that a great and unprecedented event was in the making. "How happy our people will be when our plan is fulfilled," I thought.

ii) 設問

1. What did Gagarin hear as he crossed Red Square?
2. Where did he stop?
3. What did he think of Moscow?
4. Why were there a lot of people on the streets?
5. Did they know about the space flight that Gagarin was going to make?

iii) 望ましい解答（ワークブックの使用上の注意にあるように、1. 代名詞、代動詞を用い、2. 主述部を具備するフル・センテンスで答えるように指導する。）

1. He heard the chimes of the (big) clock (on Spasskaya Tower).
2. He stopped in front of the Mausoleum.
3. He thought that it was a city with no equal in the world.

又は、He thought that it was the best (and finest) city in the world.

4. Because they felt the proximity of spring.

又は、Because they felt that spring was near at hand.

5. No. they didn't.

この段階では学生にはなるべくテキストの英文に基いて答えるように指導する。（問答の基礎的なパターンをまず習得するのを目的とする。）

単調になるのを避けるために、時々ワークブックにない質問をするのもよい。たとえば、

1. のあとでは、Do you hear any music just now? (→No. I don't.), 2. の

あとでは、(学生の一般的知識をためすために) Who is buried in the Mausoleum? 3. のあとでは(身近の問題と結びつけて興味を喚起するために) Do you think Tokyo is a city with no equal in the world? など。

一般に質疑応答は時間の節約のため口頭でなされるので、理解を徹底させるためには板書を頻繁に励行しなければならない。また学生を指名する際には名簿の順によるのも一方法であるが、私はもっぱら教室を歩きまわって随時随所で指名することになっている。こうすると、教師の物理的負担は大きくなるが、学生側からみると、目前で直接指名されるので現実感があり、雰囲気の持続に有効だと思う。

教師の使用すべき英語については、前述の「私の英語観」でふれたところで。あるが、平易簡明を絶対条件とすべきである。構文も単語もごく日常的なもの以外は避けるべきであり、学生の理解ということを第一に留意しなければならない。私の経験では、中学校の課程に出てくる英語で十分に用が足りる。程度の高低は、そのクラスの実情に即して決めればよい。

しかし英語そのものよりも、その英語の話し方が実際にははるかに大きな影響を有する。教師は「ゆっくり、はっきり、大声で」という三原則を厳守しなければならない。「英語による英語授業」の初期の段階では、教師の物理的なエネルギー支出の多少が、授業効果に直接反映してくることが多い。

さて、このようにして前半を終えると5分程度の休憩時間を置く。これは学生の疲労と緊張を緩和し、同時に語学の学習にはより合理的な45分ないし50分単位の授業を2時間連続して行なうに等しい効果を狙ったものである。この時間は文字通り自由時間で、教室への出入、雑談等が許される。

③ 展開——後半 休憩時間が終ると授業の後半が始まる。普通はこの時出欠を点呼する。(英語の雰囲気を保つために学生には英語で応答するように指導する。)後半の授業はワークブックの第2種類以下の質問に答えていくことを中心とし、その方法の概略は前述のワークブック使用心得中に述べたところで

ある。ただ平均点な学生にとっては授業の前半のための予習だけでも相当な負担となるので、後半の教材については予習を義務づけていない。実際には教師の説明を専ら聴く形となるものも現状ではやむを得ない。(第3種類の質問——疑問文の作成は、教師と学生との共同作業としている。)

最後に、たいていの場合、10分から15分の時間をとって、1人ないし2人の学生の「スピーチ」を聴くことにしている。この目的は教師以外の者の話す英語にも接するということのほかに、学生の生きた英語に対する関心を喚起し、授業への主体的参加を促すということにもある。人前で英語で一場の話しをして、しかもそれが理解されたということは、多くの学生にとって貴重な経験となるであろう。「スピーチ」の実施方法としては、前週に特定の学生を指名しておく。テーマはワークブックの巻末のリストから選んでもよいが、学生自身が任意に決めることが多い。たとえば、‘My Hobby’, ‘My School Life’, ‘How I Enjoyed My Vacation’, ‘On Public Hazards’ など、さまざまである。中には即席でまとまった話のできる学生もいるが、たいていは原稿を作ってきて半ば朗読することになる。その際にも材料にした新聞、雑誌等からそのまま引用するのではなく、自分自身の英語に言い換えるように指導している。

「スピーチ」のあとには質疑応答の時間を設ける。学生側から質問が出ない時には、教師が誘いの水の意味で質問する。「スピーチ」のテーマも面白く、担当者の準備も万全でまたその話し方も適切な場合には、クラス全体の学生が真に「参加している」 *participating* という実感が生ずる。このような体験は非常に有益であって、数十ページの英文を読むよりも、「生きた英語」「コミュニケーションの道具としての英語」というものを如実に感得せしめるものがある。

「スピーチ」が終ると授業時間はすでに尽きている。そこで必要があれば次の「スピーチ」担当者を指名し、その日の学習状況について簡単にコメントして授業のしめくりとするのである。



#### 4. 「英語による英語授業」の問題点

私が日頃行なっている授業の実態は上述の通りであるが、その成果については私は自分でもかなりの不満をもっている。それは一言で言えば、「学生があまり口を開かない」ということである。学生の積極的参加がなければ、「英語による英語授業」の当初の目標である「表現力の養成」は到底達成できない。このような現状にあるのは、ひとつには私自身の理論や方法論が不備であることにも由ると思うが、同時に教養科目としての外国語に対する一般学生の消極的態度や私学の外国語クラスに附随するさまざまな制約があると思う。以下ではいくつかの項目に分けて、問題点について検討してみたい。

1) 教材等について 前掲(p.5)の教科書は①, ②とも必ずしも妥当ではない。というのはこの教科書は、私が「英語による英語授業」というアイデアを抱くよりも以前に編注したものであって、特にこの種の授業を対象としてはいないからである。(教師が教材を熟知しているという意味で採用したにすぎない。)将来適当な教科書を作成する場合には、英米人の筆によるもので、平易簡明であり、日常生活に関連すると共に、学生の知的興味をも刺激するような性格の、ストーリー又はエッセイを底本に選ぶべきだと考える。

またワークブックについては、その成立の事情からみると、大きな問題がある。「英語による英語授業」の当初には、教科書に基いた即席の質疑応答を行っていたが、後に質問事項を謄写印刷した仮製の問題帖を作り更にそれを取捨してワークブックとして活版印刷に付したのだが、その印刷の過程で或種の事情から草稿が充分吟味されないまま活字となったからである。従って設問の形式や分量、更には質問自体についても再検討の余地があると思う。

授業の過程でその他の教材、たとえば録音テープなどを使用してはどうかという示唆もあった。私自身としては上述のような授業形式の中でその余地があればなるべく視聴覚教材もとりたいと思う。しかし私の授業は「理解」よりも「表現」に重点を置いているので、授業時間等の制約上新教材を導入する

余裕があまりない場合には、それを将来の課題にまわすほかないと思う。

2) 学生側について 学生があまり発言しないということについては、次の二つの原因がある。それは、①学生の実際的英語能力の不足、②英語使用に対する抵抗感である。

①に対しては、前述のように「英語による英語授業」に参加するためのミニマム・エセンシャルズとしては、中学課程の終りまでに学習するもので充分であるのだが、実際にクラスを担当してみると、中にはその程度の知識さえ覚つけない学生が少なくないことがわかる。その原因の究明にはここでは立入らないが、このような実情は充分考慮に入れて、いたずらに名目を逐うばかりの「模範授業」は厳につつしむべきであろう。「英語による英語授業」は大学別、課程別、学年別、昼夜別を問わず最初は無差別平等に実施したのだが、やはり実情に合わず成果も挙らないことに気がついて、現在では特定の大学の特定のクラスに対してのみ実施している。

②の「英語使用に対する抵抗感」は、①にもまして重要である。というのは或程度学力のある学生でも、日頃使い慣れない英語に対する違和感が強い場合には、この種の授業では自分の能力を充分に発揮できなくなる恐れがあるからである。そういう学生の立場から考えると、教師も学生も日本人であり、コミュニケーションの手段としては日本語で足りるのにもかかわらず、人工的に英語の小世界を作り出すことには、あまり気が進まないのであろう。そして「英語による英語授業」の本質的な問題も、実はここに存在するのである。実際的意思交流媒体としての英語に対するこの拒絶反応を除去するきめ手は今のところ持ち合さない。私がせいぜい実行していることは、「英語による英語授業」の趣旨の徹底をはかり、一時は点呼形式の出欠調査をやめて小テストを以てこれに代えたり、学生間の雑談、私語にも英語を使うように指導して、英語的雰囲気維持に努める程度である。かたくなな頭と舌をほごすためには、折ある毎に英語を使い、使わせ（出席点呼に“ Yes, sir,”と応答させる程度でもよいから）、授業の成果に対する確信に基いた辛抱強い指導が必要である。

3) 教師側について 上述のような授業を実施するにあたって、教師の側における最大の困難は、『英語による英語授業』は普通の訳読式授業に比べて、教師の物理的負担が非常に大きい」ということである。「物理的」というのは、自分にも学生にも英語的雰囲気を持続させようとしたり、話す際の速度、音量などを加減したり、教室内を絶えず巡回したり、しじゅう板書をして白墨のちにまみれたりというようなことを指す。(訳読式の授業でも授業の質ということを考えれば、精神的に相当の負担となる場合もあり得るが、少なくとも教師が肉体的に疲労することはあまりない。)そこで往々にして当初の目標から大きく後退する例も珍らしくない。たとえば私自身は、前述のオリエンテーションの項で述べた方針のうち、次の事柄は現在殆ど実行していない。それは、①毎回の小テスト、②所定の授業開始と終了時刻の遵守、③スピーチ(一部のクラスでは実施)、④授業の導入部でのいろいろな試みなどである。いやそれよりも最初(4年前)は担当している15クラス全部にこの方法で授業していたのが、現在では6クラスのみを実施しているということが、この間の事情をよく示していると思う。要するに、個人としての能力の限界である。しかし、ともかく私としては多少不徹底な形で、英語による英語授業を何とか維持していくことが重要であると思っている。

(ついでに、学生の学習結果の評価——試験のことにも触れておきたい。授業の性質上、口頭試問 *oral examination* をも取り入れるべきであるが、これは事実上不可能である。実際の試験では、学生の氏名以外には一切日本語の出でこないように出題形式を工夫して、最後に必ず一定のテーマについて20行前後の英語による論述を求めている。単に記憶力をためすのが目的ではないので、英和辞典の試験場への持込みを許可している。)

×            ×            ×            ×            ×            ×

以上が私の「英語による英語授業」の現状である。以前には、これに対する学生の反応をアンケートの形で調べたことがあったが、回答を寄せた者の中では、支持の意見が圧倒的に多かった。学生自身も素朴な形ながら外国語の授業

に対して何らかのビジョンをもっているようである。私の授業はまだ試行錯誤の過程にあって、完成したシステムとはなっていないし、また成果もこれまでのところ特に著るしいとは考えられない。しかし私の現状に対する不満とその改革を願うささやかな気持は今でもなくなっているないので、私は今後も「英語による英語授業」、広い意味でいえば「外国語による外国語授業」の可能性について、探究を続けていくつもりである。

この小論は、そのためのひとつの中間報告であり、理論面や技術面の不備は無論多いことと思うが、私の考える外国語授業の基本構想について理解と認識を得られる一助ともなればさいわいである。

(1972年12月)